



2006年

SORA 16 号

晴
夜

(16)
—
2

柴
田
佐
知
子

祝・千々和恵美子さん角川賞受賞

み
ひ
ら
き
て
骨
は
つ
て
鷹
渡
り
け
り

月
を
待
つ
歪
な
頭
前
に
あ
り

殉教の地より掘り出す落花生

天罰の下らぬ穴に蛇入りぬ

祖はすべて地中に葬り鰯雲

柿を剥くとき思ひ出す蔵があり

栗虫は栗につつまれ晴夜なり

太刀魚の錆びたる色に傷があり

ぎはぎは

服部 早苗

きりぎしに萩の乱るる海蔵寺

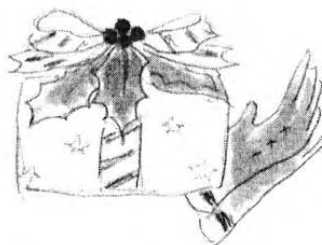
うつし身に少量の毒草の花

ひややかやパール一連つけるとき

秋祭白狐の面をこはがる子

たてかけて葛の根太き影であり

猪を撃ち猪にいのちをとられしと



おどろかす気のなき小切れ鳥威し

もう誰も太きをいはず種ふくべ

長き夜の復讐劇の第二景

暗転のざはざはとして芒原

鳩吹く風隼人瓜とは良き名なり

遠山は母貝のごとし通草の実

翹つくろふ白鳥の第一陣

まだ酒になじめずにゐるかりんの実

山眠るすこしく空気けむらせて

仰臥

苑 実耶

消灯の窓に満月入れにけり

干しあげし甲羅捨てたき亀鳴けり

仰臥のまま眉整ゆる秋思かな

入院のベッドに入るる月あかり

看護師と語るのみなり秋暑し

採血の声に目覚むる秋はじめ

点滴を見つむる一日涼しかり



寝返りを打つに痛みや夕立くる

秋天の青極まりて退院す

菊日和シャンプー台に頭を預け

杖の身を受け入れ難し草紅葉

秋うらら名前呼ばるる歌ふごと

十六夜や点滴替ゆるかけそき音

さはやかや歩行器侍む風の中

看護師の足音絶えぬ秋の夜

治療室の照明眩し蛇穴に

大花野

高倉恵美子

死の用意少し整ふ更衣

講習のおからご飯や終戦日

生身魂むかしのことはよく語る

根切虫ふたつにちぎり投げ捨てる

わがままも夫ありてこそ百日紅

病院の庭に来てゐるトマト売り



祭り獅子鳥居の下で息をつぐ

敬老日みな粧ひて集ひけり

蛇の衣のせてゐるなり大南瓜

畑より秋の蚊連れてきたりけり

ゆつくりと月の動ける読書会

夕暮れの村を巡れる彼岸花

芒野に意外な人と再会す

楽しげに夫の乗りたる稲刈機

何見ても亡き友のこと大花野

富士額

樋口みのぶ

恋猫の戻りて水を飲むばかり

帰省子の正面に顔並べけり

七夕や男にもある富士額

道問うて歩む浦町曼珠沙華

七浦を渡る号砲みあれ祭

みあれ祭見てきし夜の髪ほぐす



コスモスの上を船ゆく能古島

黄落や河馬は水面に目を浮かべ

俯きて頬の見えたる豊の秋

白壁に家紋大きく柿熟るる

鈴虫に末期の水を与へけり

秋刀魚焼く煙に顔を巻き込まれ

冬の日や寂しきときの万華鏡

親友の兄のくれたる冬林檎

細胞の息づいてくる初日かな